

# 大阪と神戸の三日

——全國保育大會—— 膳女史の葬儀—— 菊水の宴——

倉 橋 生

大阪毎日新聞社主唱の全日本保育大會が開催せられた十一月十三、四、五の三日間、大阪は實に晴朗の好天氣つき。第一日の總會、講演會。第二日の部會、午後三夜みの講演會。第三日の總會。皆豫定通り豫期通りの大盛會であつた。私は第一日午後のBKからの大會記念放送を、第二日夜の中の島公會堂の講演の外の、總會三部會の忠實な列席者として、建議に、討議に、研究發表に、此の大會の成功を心から喜んだ。殊に第二日の部會が、幼稚園部、保育所部、農繁託兒所部三部に分かれ、それ／＼専門的に會議の進められたことは、従來の保育大會に於て、當然そうあるべく考へられつゝも實行せられなかつたところで、本大會の一大新味として特筆すべきである。又我國保育事業

の綜合的發展のために、最も有意義なるものであつた。その會場が軍人會館、國民會館、大毎本社講堂に分れてゐるので、(それ程各部多數の出席)そのぎれにも一貫して出席することは出来なかつたが、その間を馳け廻りながら、斯うして三部を並べて見るに、いろ／＼に新らしく考へられる點も尠くなかつた。特に、我國の幼兒問題をさう観るべきかに就て、廣い見渡し、遠い見通し、更に細かい考察の必要が、もつと要求されてゐることを思はざるを得ない。

それにしても、此の大會の斯くの如き盛會は、我國保育界のために欣慶この上ないことである。主唱幹部諸氏、中にも安間公觀氏の大きいなる努力を感謝しなければならぬ。

保育大會の終つた十五日。その日は故郷たけ子女史の本葬日である。午後二時半から西區京町堀、順正寺に於て盛大に行はれたが、此の大阪市、殊に此の西區に於て四十五年の幼稚園保育生涯を、立派に而して幸福に送られた故人に對し、よくぞそのまゝころを選ばれたものまゝいはなければならぬ。公の諸方面からの多くの鄭重なる弔辭の後に、友人まゝして望月、稻葉兩女史の思ひを偲ぶ弔辭の後に、故人の保育を受けた江戸堀幼稚園五千の幼児の總代まゝして、京都帝國大學經濟學部長汐見博士の、故人に對する感謝まゝ尊敬まゝに充つる弔辭は、故人の温容を最も髣髴させるものであつた。私も亦、御遺族に促されて弔辭を申上げたが、思へば、故人に初めてお目にかゝつたのが此の西區であり、爾來三十年餘。常に敬愛せる先輩であり、實に變りなき私の知己であつた。知人に對して誠心を移し動かすこゝの決してなき、故人の厚誼の如きは多くないであらう。

故人が江戸堀幼稚園を引退せられた時に、幼稚園人まゝしての故人に就て、私は本誌に一文を草したこゝがある。そ

の後の老女史は、京都嵯峨の里を閑居ませられたが、多くは鎌倉熱海まに悠々せられた。それはその風光ま温暖まが、お氣に入たからでもあらうが、令甥氏原醫學博士の別墅に令姉氏原銀子女史まの心おきな朝夕を樂しまれたのであつた。軽く糖尿病を病んでそのために視力を弱めてゐられたが、七十餘歳の老齡まは思はれないまめまめしさで、庭木、草花を愛するのが日課であつた。有徳人にふさわしい福やかな晩年であつたのである。しかも、その悠々の間、尙ほ切なる關心を持ちつゞけられたのは幼稚園界であつて、その消息を聽くを樂しまれ、われ等も亦事ある毎に幼稚園へお招きしたが、必ず喜んでその集るに來り加はられた。そんなこゝで、引退後は却つて東京のわれ等が常に近くにゐられた譯であり、鎌倉で急に御病氣革まれた時、及川さんまいつしよに、直ぐ馳けつくるこゝが出来、お目にかゝるこゝも出來たのであつた。

更めて、我國幼稚園界の貴き元老を哀惜する。

○

こんごこそえ、折りや、ちよつこ神戸へも連れてきます

せき、神戸のおばあさん若い人達が懇に言つて呉れるが矢張りその時間がない。此の一、二年、度々神戸を通過しながらいつも素通りをして濟まないと思つてゐるのだが、こんごも亦暇がこれそうにない。残念に思つてゐる。そこは元氣のおばあさん、豫約してある寢臺券を二列車ほど遅いのに取り替へを交渉させて、ぐんぐん私をひつばつて、あの何んさかいふ、えらい急速度の電車へ乗せて、おゝしんごもいやはらんのである。

電車は直ぐに元町へ着。あの菊水の擬つた座敷へ案内される。もうそこには、神戸の若い(おばあさんよりは)人達が待ち受けてゐる。こんな咄嗟の場合、挨拶は一同合、で濟ます。直ぐに例の評判の金箔入のお銚子が出る。その金箔のきゝめで、大阪以來の動悸がおさまる。さあもう、面くらひでない御馳走くらひ。その間に、しんみり(?)した懐舊談が出たり、呑氣な懐今談が出たり、胃も心もうまい味に充ち満つるのであつた。

おばあさんといふのは望月くに女史、若い人達といふのは、山崎、田中、豊島、富中、宮崎、松永の諸若女史。勿

論みんな豫て懇意の幼稚園人。そこで望月さんには、面を向つては流石こんな愛稱は捧げないが、何しろ、私が關西で初めて會つた幼稚園の第一番目の先輩なのだから、私の思ひ出がいつも其の時の若い私を基準とする以上、今の望月さんがおばあさんであるのは、當然(?)の數理である。兎に角く望月さんは、私を關西保育界へ結びつけた最初の知己であり、膳さんも望月さんの紹介で初めて會つたのであつた。そんな譯で、自然、話もその方へ向く。但し、知らない人のために念のためいつて置くが、望月さんは膳さんよりすつこくお若いのである。關西保育界の元老がだんく數少なくなつてゆく時、その元老間で、仕事の上では先きに立つても、年齢の上では後に居る望月女史の愈々益々元氣であることを祝福して、又、もう一ぱい、金箔入りの盃をあげるのであつた。理窟ぬきで慰安して下さつた、古なじみなつかしの神戸の一夕。